

平成30年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 向洋 中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、3年生を対象として、「教科(国語, 数学, 理科)に関する調査」と「生徒質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 数学, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 生徒質問紙調査

生徒質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

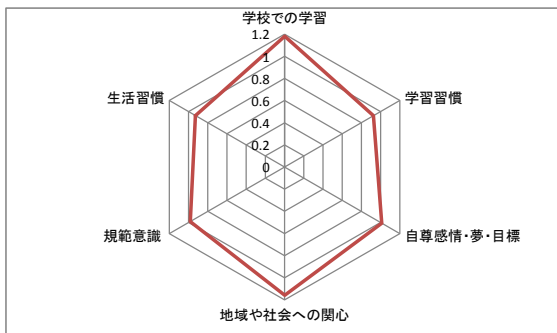
(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 数学A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		数学A		数学B		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	24.0	75	5.4	60	22.6	63	6.1	44	17.3	64
全国	24.3	76	5.5	61	23.8	66	6.6	47	17.9	66

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域は若干高いが、「読む」領域に課題が残る。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よってきた問題	・伝えたい事柄を、相手に分かりやすく伝わるように話したり書いたりする問題	
	努力が必要な問題	・情報を整理し、書かれている内容を捉える問題	
国語B	全体的な傾向や特徴など	・「話すこと・聞くこと」の領域は比較的高く、「書くこと」の領域は低いが、無解答率が0の問題が多い。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	・相手の反応を踏まえながら話したり、登場人物の言動の意味などを考え、内容を理解したりする問題	
	努力が必要な問題	・読んだ内容を踏まえて書くような、応用する力が必要な問題	
数学A	全体的な傾向や特徴など	・すべての領域で全国の平均正答率を下回っている。特に関数に関する領域が-9.2%であり、喫緊の課題である。関数の意味や比例、反比例、一次関数の特徴など基礎・基本の内容から、復習していく必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	・三角形の外角や多角形の内角の和の性質を確認する問題の正答率が高い。	
	努力が必要な問題	・関数に関する問題の正答率が低い。特に、比例のグラフから、xの変域に対応するyの変域を求める問題の正答率が低く、無解答率が高かった。	
数学B	全体的な傾向や特徴など	・すべての領域で全国の平均正答率を下回っている。 ・記述式に関する問題の正答率や無解答率が高い。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	・資料の活用に関する問題は、全国平均に満たないが他と比べて正答率が高い。	
	努力が必要な問題	・証明を完成させる問題や、根拠をもとに説明する問題に課題があり、説明するトレーニングが必要である。	
理科	全体的な傾向や特徴など	・自然現象への関心・意欲・態度は、全国平均より高い。基礎となる知識・理解の定着ができておらず、問題解決の知識や技能の活用に課題がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	・生活経験に基づいた問題に関しては、意欲的に解答している。探究の過程を振り返り、新たな疑問をもち深めようとする問題の正答率は比較的高かった。	
	努力が必要な問題	・知識や理解の定着を図る問題に努力が必要である。まとめや振り返りの徹底や知識や技能の活用を繰り返すことなどで定着を目指す。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・生活習慣に関する項目の割合が低い。特に、朝食を毎日食べている生徒は、全国より10ポイント程低く、課題である。 ・学習習慣に課題がある。特に家庭学習の時間が全国より低い。家庭学習を充実させる取組が必要である。 ・将来の夢や希望をもっている生徒は全国と同じくらいいる。それぞれの夢を実現させるために具体的な目標設定を行い、行動に結び付けさせることが必要である。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ○全教員が「わかる授業づくり5つのポイント」を徹底するとともに、校内授業研究会を年間1教師1回以上を目途に実施し、「5つのポイント」の質の向上を図る。 ○特設時間帯「学力向上タイム」の取組を昨年度同様、継続して行い、基礎基本の学習時間を確保し活用する。その際、「学力定着サポートシステム」の課題を活用し、各自が課題を選択しながら学習に取り組むようにする。
--

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> ○管理職による、宿泊行事の説明会等を活用した本校の学力の現状について説明や、PTAを巻き込んだ家庭学習時間増への取組の実施(最低学期に1回) ○担任による、日々の「毎日の記録」点検活動による、家庭学習時間増へのはたらきかけ(毎日) ○国語、数学、英語を中心に、週末課題に取り組ませるようにする。 ○管理職・担当者による、給食を「生きた教材」とした食育の充実を図る。併せて、通信や家庭教育学級を活用して、保護者の食育への啓発を図る。
